

やまのべ 偉人伝心 (安達峰一郎編)

11. 帝国大学卒業2週間後に高沢鏡子と結婚した安達峰一郎

●鏡子との結婚

明治25年7月に帝大を卒業した峰一郎は、翌8月に高沢鏡子と結婚します。卒業して就職も決まらないうちに結婚は早すぎるようにも感じられますが、誰かの勧めで急に決まったのではなく、二人の交際は峰一郎が帝大に入学した年からすでに始まり、卒業まで約3年間あったので、卒業を期に結婚したのだと思われます。このとき峰一郎は23歳、鏡子は21歳（満年齢）でした。

二人の交際が始まったときから結婚までの経過を見てみると、峰一郎は同22年10月1日、鏡子に最初の手紙を出しています。帝大に入学したのが同年の9月11日ですので、入学後すぐということになります。これは、鏡子に対する思いが以前からあって、その思いを最高の念願だった帝大入学のときに伝えようとしたのだと想像されます。

鏡子は峰一郎に法学を初めて教えてくれた恩師の高沢佐徳の娘です。峰一郎は山形の中学師範学予備科に在学するとき同僚から、鏡子は師範学校付属小学校でたいへん優秀な生徒であることを知らされていきました。同20年に鏡子が上京して東京女子高等師範学校に入学し、宮城浩造の世話になっていることが分かり、帝大入学後に長年ひそかに思い続けてきた思慕の情を綴った、4,000字余りの長い手紙を送ったのです。

その思いが鏡子に通じ、その後は二人の熱い交際が続きました。その手紙の内容については、安達峰一郎博士顕彰会から発刊された、『国際法にもとづく平和と正義を求めた安達峰一郎～書簡を中心にして～』に、峰一郎が鏡子に宛てた手紙や恋文が5通載っていますので、ぜひみなさんも読んでくださるようお勧めします。



峰一郎と鏡子の結婚記念写真

ただ残念なことに、鏡子から峰一郎宛ての恋文が1通も残されていません。これは、峰一郎の恋文を残しておいてくれたのは鏡

子夫人ですが、峰一郎が受け取っていただろうと思われる鏡子からの恋文は、夫人が戦後に日本に戻ってくるときにおこがましいと思って破棄されたのではないのでしょうか。おそらく夫人の恋文は、自身が『万葉集』よりはるかに多い7,000首余りの和歌を詠んで出版されたほどの方ですから、さぞすばらしいものだったのだろうと想像されます。

二人の結婚式は、垂石太郎吉（後の山辺町長）の仲人で同25年8月1日に、おそらく峰一郎の生家で挙げたと思われます。

●鏡子の生い立ち

高沢鏡子は父佐徳と庸子の長女として同3年10月19日に生まれました。高沢家はもと天童藩士で家老でしたが、佐徳は明治以降は山形に移り、代官（現在の弁護士）となり、同14年に重野謙次郎（もと天童藩士、自由民権運動家で後に代議士になる）らと“法律学社”を開設して法律を教授しました。峰一郎は山野辺学校の教員助手を辞めてここに入社したとみられ、このとき佐徳から法律の手ほどきを受けたと考えられます。

鏡子はこのような父のもと、山形に師範学校と同時に開設された付属小学校に入学し、同18年に優秀な成績で卒業しましたが、当時まだ山形には女学校がなかったので、師範学校の先生に家庭教師を依頼して勉学に励み、同20年4月に上京して東京女子高等師範学校に合格しました。同24年3月に卒業し、4月には山形県尋常師範学校の教師になりました。

峰一郎と結婚した後は、同26年3月まで勤務し、退職後は東京で一緒に暮らしています。

●結婚後外務省へ

峰一郎は結婚後、9月に外務省に勤務しながら、明治法律学校（後の明治大学）と和仏法律学校（後の法政大学）の講師を務めました。翌年、イタリアの公使館書記生として外国に勤務します。

文：山辺町ふるさと資料館長 佐藤継雄

参考図書：『国際法にもとづく平和と正義を求めた安達峰一郎～書簡を中心にして～』安達峰一郎博士顕彰会 平成23年6月発刊